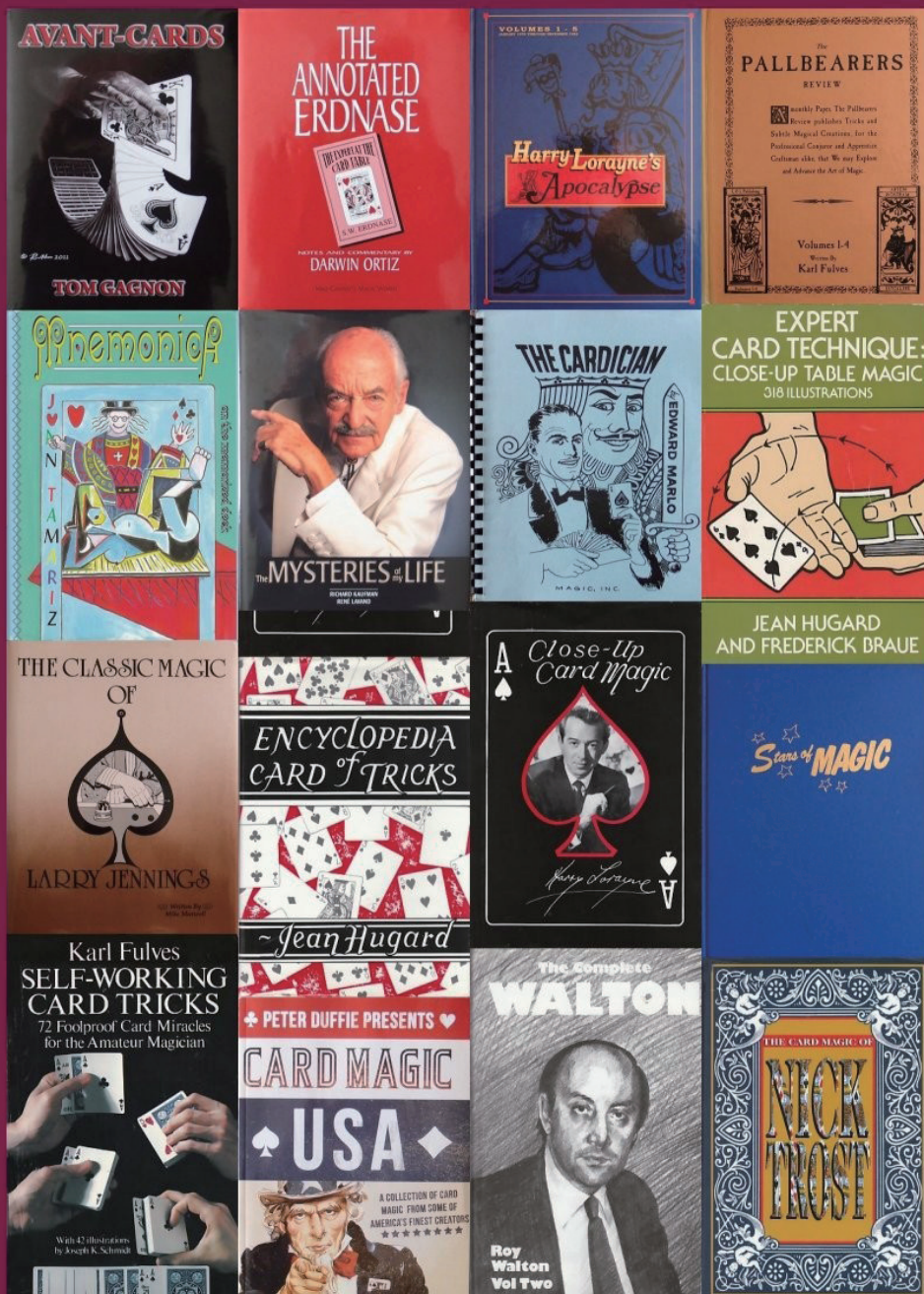


Card Magic Magazine



No. 10

February 3, 2013

by Hideo Kato

カードマジック徹底研究

マッチングトリック

Part 1 マッチングペア

ノアズフレンズ

= サム・シュワルツ、“ポールベアラーズレビュー”、1973年4月 =

これは本来、'ジェミニツイン'の特集に含めるべき作品ですが、同特集編集時には見つかっていませんでしたので、今回の特集に収録いたしました。

* 準備 *

3組のマッチングペア計6枚を、デッキのトップからa、b、c、a、そしてボトムにc、bとセットします。マークや数がバラバラの3組を使ってください。

* 方法 *

デッキをまん中からカットして下半分を上のにのせるとき、間にブレイクを作ります。カードをリフルして相手にストップをかけさせ、ブレイクから分けるリフルフォースを行います。分けた左手のトップから3枚のカードをテーブルに置き、3人の客に渡します。

デッキを表向きに持ち、ヒンズーシャフルを始めますが、初めの2枚は1枚ずつ左手にランします。aのカードを持っている1人目の客にストップをかけさせます。シャフルのかなり早い段階でストップがかかるように、少しずつ取っていくようにします。ストップがかかったら、左手のカードの上に1人目のカードを裏向きにのせてもらい、その上に右手のカードをのせます。

ふたたびヒンズーシャフルを始めますが、いちばん下(バック)にあるcのカードを下に残すようにカードを取ります。そして2人目にストップをかけさせ、そこで左手のカードの上に彼のカードを裏向きにのせさせ、その上に右手のカードをのせます。

3人目にも同様に、ヒンズーシャフルしてストップをかけさせ、左手のカードの上に彼のカードを裏向きにのせさせ、その上に右手のカードをのせます。

デッキを裏向きにスプレッドすると、表向きのカードが3枚分散しています。ここで「ノアの方舟に

動物たちが乗るとき、必ずペアで乗りました。カードでも同じことが起こります」と言って、表向きのカードとその左隣りのカードを抜き出し、それらがマッチするカードであることを見せます。

アンカインドカット

= ピーター・ケーン、"ファーザーセッション"、1975年 =

* 準備 *

デッキのトップに4組のマッチするペアをセットします。たとえば、ハートの8とダイヤの8、クラブのKとスペードのK、ダイヤのAとハートのA、スペードの3とクラブの3。

* 方法 *

トップの8枚が乱れないようにフォールスシャフルします。「これからカードをカットして、4枚の同じ数のカードを出して見せます」と言います。

トップから2枚目の下にブレイクを作り、右親指で保ちます。左手でボトムの4分の1ぐらいをカットしますが、トップの1枚をスリップして左手のカードのトップに取ります。すぐにそのパケットをトップにのせ、ブレイク上の1枚をボトムに加え、そのパケットをテーブルに置きます。これでそのパケットのトップとボトムに同じカードが配置されました。

いまと同じことをあと2回行います。最後はトップの1枚を右手で持ち上げ、いかにもカードをカットしたごとく持ち、左手で下のカードをそのカードの上ののせてそろえます。そしてテーブルの上に置きます。

「このように4つの山にカットすることによって、同じ数のカードが4枚出てきます」と言って、各パイルのトップカードを表向きにして、各パイルの前に置きます。それらは同じ数のカードではありません。「えっ同じ数じゃないですって。確かに私は同じ数のカードが4枚出てくると言いました。けして失敗ではありません」と言って、各パイルを表向きに戻します。そしてマッチする4組のカードを指し示し「ほらこの通り、全部同じ数のカードです」と言います。

* 備考 *

セット不要の方法を考えました。シャフルされたデッキの表を自分に向けて広げ始め、トップの4枚が異なる数のカードであるか確認します。同じ数のカードがあったら、違う数のカードが4枚トップにくるようにカットします。

「これから同じ数のカードを4枚出す、というマジックを行いますが、まず同じ数のカードを特定の位置に分散させます」といって、トップから4枚とマッチするカード(同じ数で同じ色

のカード)をボトムに抜き出します。トップとボトムがマッチするカード、トップとから2枚目とボトムから2枚目がマッチするカード、というリバースオーダーにします。

オーバーハンドシャフルをしようとしてカードを中央でカットし、1枚目をインジョグして取り、あとはふつうにシャフルしていき、最後の4枚は1枚ずつランします。寝所具したカードから分けます。すると両方のパケットのトップの4枚はマッチするカードとなります。2つのパケットをファローシャフルします。インでアウトのどちらでもかまいません。これでトップから2枚ずつマッチするカードがセットされました。あとは原案通りに続けます。

テンメイト

= ジョン・リンドフライシュ、雑誌“プリカーサー”、1996年1月 =

* 準備 *

デッキのトップから10枚目とマッチするカードを11枚目から20枚目までにセットしておきます。すなわち、マッチするカードが10枚離れた枚数目にあることになります。

* 方法 *

デッキをフォールスシャフルしながら、相手に1から10までの数を心の中で決めさせます。デッキをテーブルに置き、あなたも数を決めるといって、紙片に“10”と書いて、たたんで置きます。

相手にデッキを渡し、選んだ数だけトップからディーラーさせ、最後にディーラーしたカードを表向きにさせます。手に残っているカードをディーラーしたカードの上に重ねさせます。

ここであなたの選んだ数を見せ、その数だけ相手にディーラーさせます。最後にディーラーされたカードを表向きにさせると、相手の選んだカードとマッチするカードが現れます。

* 備考 *

“プリカーサー”編集者のビル・ミーゼルは、マジシャンの選ぶ数として“10”と書くのは望ましくないので、つぎのようにして“9”と書いたらよいと述べています。

上記のセットの上に1枚関係ないカードを加えたセットとします。相手の選んだ数だけディーラーさせ、手元のカードのトップカードを表向きにさせます。マジシャンのカードを現すときも、9枚ディーラーして、手元のトップカードを表向きにさせます。

ファイブメイト

= 加藤英夫、2001年9月6日 =

前作品 'テンメイト' は、作品として集録することがためらわれましたが、あまりにも単純で当たり前の原理でありながら、いままで使われているのを読んだことがないので、参考として集録いたしました。私は改案するにあたって、つぎの3点を着眼点といたしました。

1. セット枚数を減らす。
2. セットを演技中に行う。
3. マセマティカルな感じを減少させる。

* 方法 *

シャフルされたデッキを受け取って表向きに持ち、「なるべくバラバラのカードを使います」と言いながら、フェースの5枚のカードをさり気なく見て、それらの中にマッチするカードがないことを確認します。マッチするカードがある場合は、マッチするカードがフェースの5枚にないようにデッキをカットします。

カードをリボンスプレッドします。フェースから5枚目とマッチするカードを見つけて抜き取り、左手に置きます。つぎにフェースから4枚目、3枚目、2枚目、1枚目にマッチするカードを見つけて、表向きに重ねていきます。そのあと5枚のカードを同様に重ねますが、それらは何のカードでもかまいませんが、合計10枚の中にマッチするカードがないようなカードを選びます。

抜き出した10枚をいったんテーブルに置き、スプレッドを閉じながらフェースから5枚目の下に右親指でブレークを保持し、デッキを抜き出した10枚の上に重ね、全体を取り上げます。そしてデッキを裏返しつつ、ブレークからターンオーバーパスを行います。以上でトップから5枚のとマッチするカードが6枚目から10枚目までにセットされました。(パスを使わないでやるには、フェースの5枚の下にブレークを作り、その上に10枚のをせてブレーク上の15枚をバックにまわします)。

「お互いに1から10までの好きな数を選んで、その枚数目にあるカードを自分のカードとして抜き出しましょう。心の中でひとつの数を思ってください。私の数はこちらに書いておきます」と言って、紙片に“5”と書き、たたんで置きます。

相手にデッキを渡し、選んだ数だけディーラーさせます。そして最後にディーラーされたカードを相手の近くに裏向きのまま置かせます。相手が6枚以上のカードをディーラーした場合は、ディーラーしたカードを取り上げて手元のカードの上に重ねさせ、5枚以下のカードをディーラーした場合は、手元のカードをディーラーされたカードの上に重ねさせ、全体を取り上げさせます。

ここであなたの選んだ数を見せ、相手にその数だけディーラーさせ、最後にディーラーされたカードを

あなたのカードとしてあなたの近くに裏向きのまま置きます。

いままで行ってきたことを復唱します。とくに、相手が数を選ぶまえにあなたが数を決めて紙片に書いておいたことを強調します。そして、お互いのカードを表向きにして、マッチしていることを見せます。

ジャンボカードのツーウェイスプリット

= ニック・トロスト、“カードカヴァルケイド、1972年” =

* 方 法 *

6枚のカードをまん中で水平に切ったものを使います。それら12片をよく混ぜておきます。

1人の客にカードを渡して後ろ向きになります。12枚から適当な枚数を2人目に渡してもらい、お互いに持っている断片の枚数を数えてもらいます。これはあくまでも2つの数をランダムに決めるために行うのだと説明します。数えたあとカードを重ねさせます。前に向き直ります。

カードを1人目の客に見せていくので、先ほどの枚数と同じ枚数目のカードを記憶してくれとたのみます。トップから1枚ずつ取り、1人目に見せてから裏向きにテーブルに置いていきます。最後の1枚でテーブルの11枚をすくって取ります。

同じように2人目の客にもカードを見せて、その客の数えたのと同じ枚数目のカードを記憶してもらいます。

カードをそれぞれの客に渡し、記憶したカードを取り出してもらいます。2人は同じカードの断片を抜き出します。それらを受け取り、表向きにしてくっつけて見せます。

ツーウェイスプリット・加藤版

= 加藤英夫、“カードマジックショーアップ講座”、2004年4月18日 =

* 方 法 *

10枚のカードをスプリットして、20枚の断片を作ります。よくシャフルしておきます。

2つの数を自由に決めるといって、後ろ向きになり、背後にカードを持った手を伸ばして、1人目にカットさせますが、半分より多めにカットさせます。

その客がカットしたら、右手でジェスチャーしながら、「そのカードを適当に2つにカットして、どちらかを○○さん(2人目)に渡してください」と指示します。そのとき左手はまっすぐ伸ばして体のわきに垂らします。

「そしてお互いが持っているカードの枚数を数えてください」と言って、あなたは目立たないように左手を体の前に運び、残りのカードの枚数を数えます。両手の動きがわからないよう、両脇をしめてやってください。

「数えたら2人のカードを重ねて、こちらの上ののせてください」と言って、カードを持っている左手を後ろに伸ばします。相手がかさねたら、全体を取ってシャフルしてもらいます。あなたは前に向き直ります。そして、「お2人が数えた数は私にはわかりません」と言います。

カードを受け取ります。残りのカードの枚数が5枚だったとしましょう。20から5を引くと15です。それからさらに1を引くと14になります。1人目の客にカードを見せながら置いていき、先ほど数えたのと同じ枚数目のカードをおぼえてもらいます。14枚置いたら、「もうおぼえましたね」と言って、テーブルにディールしたカードを取って、手元のカードの上に重ねます。

チャーリエシャフルを行います、最後にカットしてカードの状態をもとに戻します。

2人目にカードを見せて、先ほど数えたのと同じ枚数目のカードをおぼえてもらいます。14枚以上置いたらストップし、「おぼえましたね」と言います。残りのカードをテーブルのカードに重ねます。

あとはトロストの原案と同様に続けます。

ということはいちおうはまとまりましたが、原案が十分通用するのなら、この改案はまったく意味がありません。アル・ベーカーの名言「追われざるして逃げるなかれ」ということになります。

ウォルトンプロブレム

= チャールズ・ハドソン、雑誌“リンキングリング”、1970年4月 =

これは、雑誌“ポールベアラーズレビュー”1969年5月号に掲載された、ロイ・ウォルトンのプロブレムに対する、チャールズ・ハドソンの解答です。プロブレムは、つぎのような現象を実現する方法を考えよ、というものです。

1組の任意の位置から、連続する4枚のカードを抜き出します。そのうちの1枚を表を見ずに、ポケットに隠します。残りの3枚のカードの数を加算します。その枚数だけディールして、その枚数目のカードが、ポケットに隠されたカードとマッチするカードです。

* 準備 *

トップより、

4D、7H、10H、BK、B3、B6、R9、RQ、B2、R5、B8、RJ、BA、4S、7C、10C、RK、R3、R6、B9、BQ、R2、B5、R8。ここまでが前半の24枚。

後半の 27 枚は、BK、RQ、RJ、10D、R9、B8、7D、B6、R5、4S、B3、B2、BA、RK、BQ、BJ、10S、B9、R8、7S、R6、B5、4H、R3、R2、AD、AH、JC、Joker。

最初の 24 枚はサイ・ステブンスのように +3 の昇順になっていますが、マークの順は一定ではありません。後半はボトム 3 枚を除き、-1 の降順になっています。

ジョーカーをシーヴスのコインを押しつけたロケーターカードとしておきます。(訳注：ブリーザークリンプのように、そのカードの下でカットできるカードのことで、コーナーショートでも代用できます)。

デッキ全体をリバースファローしたあと、トップの 13 枚ぐらいをボトムにまわし、デッキをケースに入れておきます。

* 方 法 *

デッキをケースから取り出して、表向きにリボンスプレッドして見せます。スプレッドを閉じてデッキを裏向きに置き、相手に適当なところからカットさせます。デッキを取り上げて、ファローシャフルしてから、ジョーカーがボトムにいくようにカットします。

相手に 1 から 20 の間の好きな数を言わせます。その数だけディールしたあと、つぎの 4 枚のカードを横一列に並べます。

相手に 4 枚のうち好きな 1 枚を取って、表を見ないでポケットに隠させます。

残り 3 枚を表向きにして、それら 3 枚の数を合計します。そしてその答えの数だけゆっくりとディールして、答の枚数目のカードをテーブル中央に置きます。

ポケットからカードを取り出させます。そのカードとテーブル中央のカードを表向きにします。それらはマッチするカードです。

* 備 考 *

私は方法の説明の冒頭で、デッキをケースから取り出して、表向きにリボンスプレッドして見せます、と書きましたが、原著では、いきなり相手にデッキをカットさせるところから始めています。リバースファローしておいたデッキをファローで戻すという手法を使ったのは、デッキを表向きにリボンスプレッドできるようにするためだと思うのですが、それが欠落しています。

私は、スタックされたデッキをリバースファローしておいて、演技の最初にファローでもとに戻すというやり方をしたくありません。その行為自体が怪しく見える空です。むしろそのままデッ

クを表向きにリボンスプレッドして見せます。ボトム部分は広く広げないようなやり方をすればよいのです。もちろん、何らかのフォールスシャフルをしてもかまいません。ファローで戻すよりもましなやり方はいくらでもあります。

双子の再会

= 加藤英夫、2012年9月25日 =

‘ウォルトンプロブレム’に対して、ハドソンが示したセットでは、4と7と10の場合に同色同数ではなく、色が違うカードが出る場合がありますので、必ず色と数が一致するようなスタックを構成いたしました。そして最後のリビレーションの表現方法変えました。なおかつディーラー枚数の許容範囲も、2枚～26枚と広げることができました。

* 準備 *

トップより、

JS、AH、4D、7C、10S、KH、3S、6D、9C、QC、2H、5S、8D、JH、AC、4S、7H、10D、KC、3D、6C、9H、QH、2S、5D、8C、ここまでが前半。

後半は、KD、QS、JD、10C、9S、8H、7S、6H、5C、4H、3C、2D、AS、KS、QD、JC、10H、9D、8S、7D、6S、5H、4C、3H、2C、AD。

* 方法 *

「カードの中で双子というのは、同じ色で同じ数のカードのことです。たとえばハートのAとダイヤのAがそうです。これからお見せするのは、離ればなれになった双子を再会させるというマジックです」と話をして始めます。

デッキを取り出し、「たいていのマジシャンはかっこよくカードをシャフルしますが、私はカードが本当に混ざったことがわかるように、こんなやり方で混ぜます」と言って、表向きでチャーリエシャフルします。最後にカットしてもとの状態に戻します。

最後にもとに戻るようにカットするには、最初にフェースから数枚取ったあと、つぎにバックから取った数枚取ったときに、その境目に右親指の先を当てておき、最後にそこでカットすればよいのです。

「よく混ざりました」と言って、表向きにリボンスプレッドしますが、フェース近くを広げないようにします。

デッキをそろえて、裏向きに相手に渡します。「カードを1枚ずつテーブルに置いていって、好きなところでストップしていただきますが、全部で52枚ありますから、その半分までなら何枚目でストッ

プしてもかまいません」と説明します。

ディーラーがストップされるまでの枚数を密かに数えます。22枚目までなら、相手の左手のトップの4枚をテーブルに一列に並べさせます。そして左手に残っているカードをディーラーしたカードの上に重ねてそろえさせます。そしてデッキを取り上げさせます。

23枚以上でストップされることはまずありませんが、その場合には、ディーラーされた方から4枚を並べます。左手のカードをテーブルのカードに重ねさせ、取り上げさせるのは同じです。

並んでいる4枚のうち、好きな1枚を指させます。そのカードを取り上げ、表向きにして左手に持ちます。それが8だとしたら、「これが8ですから、そちらから8枚のカードを置いてください」と言います。

つぎの1枚を指させ、それを取り上げて表向きに左手のカードの上に置き、そのカードの数を言って、その数だけディーラーさせます。まえにディーラーしたカードの上にディーラーさせます。

3枚目を指させ、それを取り上げて表向きに左手のカードの上に置き、そのカードの数を言って、その数だけディーラーさせます。

「最後に置いたカードを表向きにしてください」と言って、最後にディーラーされたカードを表向きにさせます。

「スペードの5ですから、そのカードの双子の相手は何ですか」と相手に問いかけます。相手は同色同数のカードを言います。4枚並んでいたうちの、最後の1枚を表向きにします。「ほら、双子のカードが見つかりました」と言います。

* 備考 *

チャールズ・ハドソンには申し訳ありませんが、もしも私がこのバージョンを作れなかったとしたら、ハドソンの原案も当書に収録することはありませんでした。色の違うペアが出てしまうという未完成なこともありました。原案のようなプレゼンテーションは、たんに原理の働きだけを見せたに過ぎません。

そして今回の改案作業で見つかったもうひとつの収穫は、チャーリエシャフルを行うときのセリフです。パケットをチャーリエシャフルするならともかく、何も言わずにデッキ全体をチャーリエシャフルするのは、あまりにも不自然です。前述のようなセリフを言うて行こうなら、おかしくありませんし、シャフル自体も本当によく混ざったように見せられます。

フリーメイト

= 加藤英夫、2004年12月16日 =

* 準備 *

このマジックでは、マッチングペアを5組使います。たとえば裏向きで上からつぎのようにセットします。

6H、3S、KC、9S、10H、3C、10D、KS、9C、6D。

* 方法 *

「カード1組の中には、26組の双子がいます。同じ色で同じ数のカードは双子なのです。ここに何組かの双子がいますが、よく混ざっています。どの双子もくっついてはいません」と言って、準備した10枚のカードを表向きに広げます。

カードをそろえて裏向きにして、「いちおうカードをカットしておきます」と言って、最初に上から3枚のカードを下にまわし、つぎに4枚を下にまわします。ダイヤの10がいちばん下にきます。

「いまからあなたに仲のよい双子を見つけていただきます。1枚ずつ置いていきますから、全部置き終わるまえに、好きなところでストップをかけてください」と言います。

「ではやります」と言って、1枚置いたら2枚目をすぐ右手に取ります。それから先はかなりゆっくり1枚ずつ置いていきます。このマジックでは、2枚から8枚置いたところでストップがかかれば、すべてうまくいきますが、1枚置いたところとか、9枚置いたところでストップがかかるとうまくいきません。ですから2枚目を手にしたら、そのあとはゆっくり置いていくのです。

あとは、何枚置いたところでストップがかかったかによって、続け方が違ってきます。

2枚置いたところでストップがかかった場合

手元のいちばん上のカードを指さして、「あなたはこのカードでストップをかけました」と言って、そのカードを表向きにして、手元のカードの上にのせます。それからテーブル上のカードを取って、手元のカードの上に重ねます。

3枚置いたところでストップがかかった場合

最後に置いた3枚目のカードを指さして、「あなたはこのカードでストップをかけました」と言って、そのカードを表向きにして、手元のカードの上に置き、それから、テーブル上のカードを取って、手元のカードの上に重ねます。

4 枚置いたところでストップがかかった場合

最後に置いた 4 枚目のカードを指さして、「あなたはこのカードでストップをかけました」と言って、そのカードを表向きにして、テーブル上のカードの上に置きます。手元の残りのカードをテーブル上のカードの上に重ねます。

5 枚置いたところでストップがかかった場合

手元のいちばん上のカードを指さして、「あなたはこのカードでストップをかけました」と言って、そのカードを表向きにして、手元のカードの上ののせ、その上にテーブル上のカードを取って、手元のカードの上に重ねます。

6 枚置いたところでストップがかかった場合

最後に置いた 6 枚目のカードを指さして、「あなたはこのカードでストップをかけました」と言って、そのカードを表向きにして、手元のカードの上に置き、その上にテーブル上のカードを取って、手元のカードの上に重ねます。

7 枚置いたところでストップがかかった場合

手元のいちばん上のカードを指さして、「あなたはこのカードでストップをかけました」と言って、そのカードを表向きにして、テーブル上のカードの上に置きます。手元の残りのカードをテーブル上のカードの上に重ねます。

8 枚置いたところでストップがかかった場合

最後に置いた 8 枚目のカードを指さして、「あなたはこのカードでストップをかけました」と言って、そのカードを表向きにしてテーブルのカードの上に置き、その上に手元の残りのカードを重ねます。

「仲のよい双子を見つけられたでしょうか」と言って、カードをテーブルの上で広げます。そして 4 枚、5 枚、6 枚でストップがかかった場合は、表向きのカードとその下のカード、他の枚数でストップがかかった場合は、表向きのカードとその上のカードを抜き出します。そして裏向きのカードを表向きにして、見事にペアが見つかったのを見せます。

* 備 考 *

目的のカードが 3、4、6、8 枚目にあると記憶しておけば、対処のやり方を思い出せるはずです。また、表向きのカードの上のカードをいっしょに出すか、下のカードをいっしょに出すかは、4、5、6 枚目の場合は”下”、その他の場合は”上”とおぼえておきましょう。

金さん銀さん

= 加藤英夫、1999年2月14日 =

ジェリー・ハートマンの'カードクラフト'(1991年)は、669ページという、1人のクリエイターの作品集としては、ギネスブックものの超大作です。研究の範囲も広きにわたり、私たちクリエイターにとっては、創作に対する大きな刺激と多くの出発点を与えてくれる一冊です。

ハートマンの解説の方法は他の専門書と違ってしています。この本のマジックに登場する技法を、すべて初めの方の章で解説しているのです。マジックの手順の途中で、ある技法を行う部分になると、“ここで'キャッチスイッチ'を行います”というぐあいに書かれています。その技法を理解していないと、その時点でそのマジックを理解することはできなくなってしまいます。

その点はページを戻して、技法解説を読めばいいのですから、めんどくさいだけのことです。困ってしまうのは、たいていのマジシャンが知っていると思われる技法については、技法の名前だけで説明をすませてしまうことです。“ここで'ドロップスイッチ'を行い”と書かれていたとき、私は'ドロップスイッチ'がどんな技法かを知りませんでした。てっきり初めの方に解説されていると思ってページをめくりましたが、どこにも書かれていません。

技法の問題以外にも、彼は説明を簡潔にして多くの作品を収録しようとしているため、説明が非常に理解しにくいのです。'トランセデンタルメイティエーション'という作品は、あまりにも複雑なハンドリングゆえに、途中で読むのをギブアップしてしまいました。これから解説するものは、理解できた部分をもとにして、ハンドリングを組み替えて作り上げたものです。

少なくとも、2枚ずつカードをトップからボトムにまわしていき、相手がストップしたペアだけが同数同色のペアで、他のペアは全部マッチしていないという現象は、私はいままで読んだことがなく、ハートマンのオリジナルではないかと思われれます。

* 準備 *

マッチするペアを8組み抜き出し、重ねます。現在の配列は、トップから2枚ずつ取ると、すべてがマッチしたペアになる状態です。トップカードを1枚ボトムにまわします。つぎにトップから2枚を順が変わらないように取ってテーブルに置き、つぎの2枚を同様に取り、先に置いたペアの上のせ、以下同様に2枚ずつテーブルのカードの上のせていきます。このように並べ替えた16枚は、表向きにスプレッドしても、セットしてあるようには見えません。

* 方法 *

16枚のカードを表向きにテーブルに広げ、「このカードはいつけん何でもないカードのように見えますが、じつはちょっと変わっているんです」と言って、カードを閉じて裏向きに持ちます。「何が変

わっているかという、このカードの中には金さんと銀さんが入っているんです」と言います。

トップから2枚を順が変わらないように少し広げて右手に取り、表を相手に見せて、「これは違う数ですから双子ではありません」と言って、裏向きにしてテーブルに落とします。つぎの2枚を同様に取り、ちらっと表を見せて、「これも違います」と言って、テーブル上のカードの上に落とします。そのあと3組ぐらいを2枚ずつ取って、表を見せずにテーブルのカードの上に落としていきます。つぎのペアの表をちらっと見せて、テーブルの上のカードに落とし、残りのカードは表を見せずに、ペアでテーブルのカードの上に落としていきます。

カードを取り上げてそろえます。トップから2枚を順が変わらないように少し広げて右手に取り、「上から2枚ずつペアで下にまわしていきます」と言って、その2枚をボトムに入れます。つぎの2枚も同様にボトムにまわします。

つぎのペアを右手に取り、「そして好きなところでストップをかけてください」と言って、右手の2枚のフェースをちらっと見せます。そのとき左手はトップカードの下にブレイクを作ります。右手の2枚をトップの上でそろえ、ブレイク上の3枚を取ってボトムにまわし、「このように下に入れてからは遅すぎます」と言って、つぎの2枚を右手に取り、「2枚を手を持っているときにストップをかけてください」といって、右手のカードをボトムに入れます。

「ストップはどこでかけてもかまいません。すぐにストップをかけてもいいですし、ずっとあとの方でストップをかけてもかまいません」と言ってから、2枚ずつボトムへまわしていきます。どこでストップがかかっても、そのときあなたが右手に持っているのは、マッチするペアです。ストップがかかったら、そのペアをテーブルの右わきの方に置きます。

「もしもストップが1回遅かったら、このペアが選ばれました」と言って、トップの2枚をダブルターンオーバーし、その2枚でつぎのカードを表向きに返します。右手の2枚を左の表向きのカードの下に入れ、それら3枚を裏返してボトムにまわします。

「それではペアをテーブルに置いていきましょう」と言って、トップから2枚を押し出して、それをそろえて表向きにテーブルのどこかに置きます。つぎの2枚も同様に表向きに置きますが、先に置いたペアと離して置きます。以下、各ペアをバラバラの位置に置いていきます。置いた時点では2枚をそろえておき、下のカードが見えないようにします。

「あなたはこれらのペアを選ばずに」と言って、いま分散させたペアを指さし、「こちらのペアを選びました」と言って、わきに置いてある相手を選んだペアを指さします。「これらのペアはこのようにバラバラの組合せです」といって、各ペアの2枚をずらして見せます。

「最初に、この中には金さんと銀さんが入っていると申しましたよね。金さんと銀さんは双子なんです」と言って、相手の選んだペアを表向きにして見せます。

* 備 考 *

ハートマンのやり方では、セットを使わずに、シャフルされたデッキから1枚ずらしでペアを出していきます。すなわち、最初に適当に2枚を置いたら、その2枚のうちの上の1枚とマッチするカードを、つぎの2枚の下カードとして出して重ねています。この方法は考え方として素晴らしいのですが、実際に行うとカードを何回も広げ直すことになり、それだけで怪しい動作になってしまいます。

したがって、私の方法では、初めからカードをセットしておくことにしました。むしろセットした16枚を別に用意しておいて、パケットトリックとして演じてよいと思います。

ダブルコインシデンス

= 加藤英夫、1972年1月14日 =

* 方 法 *

インビジブルデッキとふつうのデッキを使います。

両方のデッキをテーブルに置きます。ふつうのデッキを表向きにスプレッドし、相手に好きなカードを言わせます。そのカードを探しつつ、インビジブルデッキでそのカードと背中合わせになっているカードも見つけます。スプレッドを閉じるとき、対のカードの左に左親指の先を当てて閉じ、そのあとそこからカットします。対のカードがトップに配置されます。それから相手の言ったカードを抜き出して、相手に裏向きに持たせます。

裏向きのデッキを両手の間に広げて、「まん中あたりに入れてください」と言って、相手がさし込んだところより右で分け、右手を返して相手のカードをつかみ、右手を向こうに返して相手のカードを表向きにして、その上に左手のカードを重ねます。プロフェシームーブです。これによって、表向きのカードは対のカードの隣りに入ります。デッキを表向きにリボンスプレッドします。

「世の中には偶然の一致という現象がありますが、マジックの世界では、不思議な一致が起こります。あなたは自由にカードを選び、自由な位置に入れました。こちらのカードを見てみましょう」と言って、インビジブルデッキを取り出し、裏向きになっている相手のカードと同じカードが裏向きになるように広げます。

「よく見てください。こちらにも裏向きのカードがありますが、同じクラブの8の隣りに入っています」と言って、両方のデッキから、裏向きのカードとその右隣りのカードを抜き出します。

「これは不思議な一致ですが、マジックの世界では、奇跡の一致が起こることがあります」と言って、両方の裏向きのカードを表向きにして、同一のカードであるのを見せます。

プレコグニション

= ロバート・バーン、雑誌“リンクリング”、1970年4月 =

1組から相手に選ばせて、それをデッキの中にひっくり返して入れます。別の組を取り出して広げると、表向きの中に1枚裏返っています。最初の組を表向きに広げます。両方の組に入っている裏向きのカードを表向きにすると、同じカードです。

この現象のマジックを、誰かは忘れましたが、'プレコグニション'と呼んでいました。その原案を受けて、この改案が作られたようですが、方法を読むとがっかりします。

* 方法 *

あらかじめひとつの組のまん中あたりに、1枚のカードをひっくり返しておきます。

別の組で、同じカードをフォースします。デッキを表向きにして、裏向きのまままん中あたりに入れさせ、そして表向きにリボン Spredd します。中央あたりに、相手の選んだカードが裏向きに入っています。

わきに置いてあった準備した組を取り、表向きにリボン Spredd します。中央あたりに裏向きの1枚があります。両方の裏向きのカードを抜き出して、表向きに見せます。同じカードです。

* 備考 *

方法を読むと作品として記録するほどのものではないと感じますが、この種の現象で数多くある方法の中で、外見上はもっとも無駄のないやり方です。実用的という意味では、価値のある方法だと思います。

もちろんこのマジックに使うフォースは、クラシックフォースが最適です。クロスカットフォースなどでは、不思議さは出せるものではありません。見方を変えれば、クラシックフォースという最強の武器で表現しえる、これはもっとも効果的な方法だといえます。

このやり方を作品とみなすのなら、フォースを使ったマジックはいくらでも考えることができることに気づきます。たとえばデュプリケートカードをポケットに入れておけば、選んだカードがすぐにポケットに飛行します。

私たちは、そのように当たり前のアイデアを、面白くないとか巧妙ではないという理由で、深く追求しない傾向にあります。マジックは方法の巧妙さではなく、方法を通して表現できる現象にあるということを思い出せば、この作品が示してくれた教訓は、たいへん価値のあるものだということになります。

では、クラシックフォースが失敗した場合は、いったいどのように対処したらよいでしょうか。それはこのマジックを演じるときに、最初から2組使うことを明示しないで始めるのです。

最初に2組取り出してテーブルに置いておき、1組でいくつかのトリックを演じたあと、別の組の中にひっくり返しておいたカードをクラシックフォースします。フォースが失敗したら、何らかのカード当ての現象を行います。成功したら、上記のように演じます。

では、他のマジックの演技中に、フォースすべきカードをボトムに持ってくるにはどうしたらよいでしょうか。それはあらかじめフォースカードをクリンプしておくのです。他のマジックの演技中にクリンプカードをボトムに運びます。

では、このマジックをもっと生かすにはどうしたらよいでしょうか。それはあと1組のデッキを使うことです。それはインビジブルデッキです。

「もういちどやってみましょう」と言って、3組目を取り出してテーブルに置き、「この中にはあらかじめ1枚のカードがひっくり返してあります」と宣言します。

こんどはフォースではなく、あなたが後ろを向いているときに、相手に自由に選ばせて、それを表向きのデッキの中で裏向きに入れさせます。

前に向き直り、デッキを取り上げて、両手の間で広げ、裏向きのカードを示し、「あなたはこのカードを自由に選びました。私は何のカードか知りません」と言って閉じるとき、裏向きのカードの下にブレイクを作り、そろえる動作でそのカードを右にサイドジョグします。



右手の甲を観客の方に向けて、図1のようにカードをそろえる動作をするとき、ジョグされたカードをグリンプします。そろえたデッキを相手に渡します。

インビジブルデッキをそれなりの向きで取り出し、「お互いにカードを広げて裏向きのカードを見つけましょう」と言って、お互いに広げ、あなたは目的の裏向きのカードをアップジョグさせます。相手にもアップジョグさせます。「ワンツースリーで同時に裏向きのカードを抜いて、表向きに戻しましょう」と言って、「ワンツースリー」でアップジョグカードを抜いて表向きにします。同じカードです。

作品を読んで「つまらない」と思って捨てるか、それとも良い部分を生かせるか、それはマジシャンの感性にかかっているのかもしれませんが。

Part 2 赤黒マッチング

オポジットアトラクト

= カール・ファルブズ、"セルフワーキングカードトリックス"、1976年 =

* 方法 *

このマジックは、男と女が引きつけ合うというテーマで演じます。

表を自分に向けてカードを広げ、4枚のKを抜き出して裏向きにテーブルに置きます。つぎに4枚のQを抜いて、裏向きにKの上ののせます。「KとQを使います」と言います。残りのカードはわきに置きます。

8枚を裏向きのまま、オーバーラップさせて広げます。そして、相手に任意の4枚を選んで、図1のように引き出させます。



引き出されたカードを抜き出し、テーブルに置きます。残りのカードをそろえ、「4枚のカードが残っています」といって、4枚を逆順になるように数えてひとつの山を作ります。

2つのパイルのトップから、1枚ずつ同時に表向きにしていき、KとQがペアになっているのを見せます。

オポジットアトラクト・加藤版

= 加藤英夫、1995年7月4日 =

ファルブズの'オポジットアトラクト'原案において、マークが違うKとQがペアになるのは受け入れがたく、あえて赤と黒のカードがペアになるという現象に変えてみました。ときには、要素を省略することも、改案のひとつの考え方です。

* 方法 *

5枚の赤と5枚の黒を抜き出して重ねます。トップ側が赤であるとしします。私の演出では、'アウトオブジスワールド'タイプの演技として演じますから、10枚を抜き出したあと、カードをフォールスシャフルします。

10枚を左から右にオーバーラップさせて広げ、相手に5枚のカードを引き出させます。引き出されたカードを1枚ずつ抜いて左手に置いていきますが、右のカードから左に向かって取っていきます。その結果抜き出した5枚は逆順になります。残りのカードをそろえます。

相手が引き出すとき、抜き出した5枚のうち、上の何枚が同じ色であるかを認知しておきます。上から3枚が赤であるとしたら、ということは、下の2枚が黒のカードです。

ここで原案のように、両方の山から1枚ずつ表向きにしていけば、赤と黒がペアになりますが、私のやり方では、一方の山から赤、他方の山から黒が出てくるように見せます。

2つのパケットを10cmぐらい離して置きます。両方のパイルから、左右の手でトップカードを取り、カードを立てて表を自分の方に向け、2枚を重ねますが、赤い方を必ず手前に重ねます。図1。



そして左手を向こうに返して、カードを表向きにしますが、図2のようにカードをVの字に広げます。赤を右に広げるようにします。



そして2枚をV字に広げたまま、図3のようにテーブルに置きます。



それぞれのパイルに同色のカードがあるかぎり、同じ置き方をします。上記の例では、3枚目までが同色ですから、3枚目まで同じようにディーリングします。

色が反対になったら、左手のカードを右手のカードの手前に重ね、左手を返すときに、左親指で押すことにより、左右のカードを入れ替えて赤を右に広げて、テーブルのカードの上に置きます。以上によって、左右の山から同じ色のカードが5枚ずつ現れたように見えます。

ミックストカラーズ

＝ボブ・ロング、“101 アメージングカードトリックス”、1993 年＝

* 方 法 *

7 は不思議な数だからと言って、相手にデッキを渡し、黒いカード 7 枚と赤いカード 7 枚を抜き出させます。残りのデッキはわきに置かせます。14 枚を受け取り、「これから先に起こることを予測して、それに合わせてカードを並べておきます」と言って、表を自分に向けて赤と黒を分離させます。

「これからあなたに 7 枚のカードを選んでいただきます」と言って、トップカードを左親指でプッシュして、右手でそのカードを指さし、「このカードはいりますか、それともいりませんか」とたずねます。「いる」と言われたら、そのカードを相手の前に置きます。「いない」と言われたら、あなたの右手に持ちます。つぎのカードをプッシュして同じようにたずね、「いる」と言われたらテーブルの上のカードの上に置き、「いない」と言われたら右手のカードの下に取ります。

そのようにして 7 枚のカードと 7 枚のカードに分かれるように進めます。両方のポケットを並べてテーブルに置きます。7 の不思議なパワーによって赤と黒が引きつけ合ったと説明して、両方のパイルから 1 枚ずつ取り、2 枚を合わせて表向きにしてテーブルに置いていきます。すべてが赤と黒のペアとなります。

インフルエンシャルペアーズ

＝ロイ・ウォルトン、“ポールベアラーズレビュー”、1968 年 4 月＝

* 準 備 *

赤裏のデッキをつぎのようにセットします。赤赤、赤赤、黒黒、赤赤、黒黒、黒黒、黒黒、赤赤、黒黒、、のように、同じ色のカードを必ず 2 枚ペアにして、赤もしくは黒の連続ぐあいは適当に並べます。

青裏のデッキの配列を、赤デッキの配列のミラーオーダーにセットします。すなわち、青裏カードのトップからの赤ペアと青ペアの順番が、赤裏のデッキのボトムからの順番と同じにします。両方のデッキをそれぞれのケースに入れておきます。

* 方 法 *

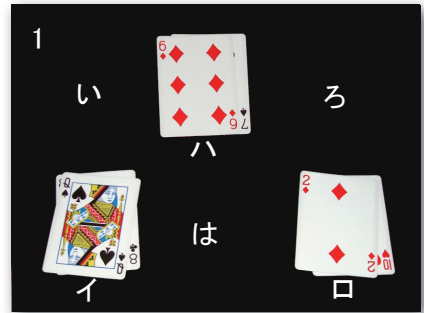
2 つのデッキを取り出し「どちらのカードを使いましょうか」と相手にどちらかを指定させ、指定されたデッキをケースから出します。説明上、赤裏デッキが選ばれたとします。相手にそのデッキを渡し、トップから 1 枚ずつ 2 つの山に交互に分けて、26 枚の山を 2 つ作らせます。

2 つのポケットのうち好きな方を相手に取らせ、あなたは残りのポケットを取ります。お互いにカー

ドをシャフルしますが、あなたはフォールスシャフルでカードの順をまったく変えないようにします。そして2つのパケットを並べてテーブルに置きます。

青裏のデッキをケースから取り出して、フォールスシャフルします。そしてディーリングポジションに持ちます。相手に赤裏の2つの山のトップから、1枚ずつカードを取って表向きにさせます。

それらが2枚とも黒のカードである場合は、図1の（イ）の位置に置かせます。2枚とも赤のカードである場合は、（ロ）の位置に置かせます。2枚が黒と赤のカードである場合は、（ハ）の位置に置かせます。



あなたはあなたの持っているデッキのトップから、2枚のカードを裏向きのままに取って、相手が置いた位置の対面、すなわち（イ）に対しては（い）、（ロ）に対しては（ろ）、（ハ）に対しては（は）の位置に置きます。

相手にふたたび2つの山から1枚ずつ取って、先ほどと同じ基準でしかるべき山に重ねさせ、あなたのデッキから2枚のカードを取って、相手が置いたの対面した山に重ねます。これをすべてのカードがなくなるまで続けます。

以上が終了すると、（い）の山はすべて黒のカード、（ろ）の山はすべて赤のカードになっています。（は）の山は赤のペアと黒のペアがミックスされた状態になっています。

表向きのカードの方を指さし「こちらのカードの混ざり方のこちらのカードに影響を与えているはずですが。結果を見てみましょう」と言って、（は）のパケットを取り上げ、表を自分に向けて広げます。このパケットは赤と黒が混ざっていますが、まともに相手に見せると、赤や黒が連続している部分が見えてしまいますので、赤と黒がよく混ざっている部分を広げてから、表を相手に見せ「ほら、こちらは赤と黒が混ざっています」と言います。

つぎに（ろ）のパケットを取り上げ、これはテーブルに表向きにスプレッドして、全部赤のカードであるのを見せ、「こちらは全部赤のカードです」と言います。最後に（い）のパケットを取り、表向きにスプレッドして全部黒のカードあるのを見せ、「はいこれですべてのカードが影響を受けたこととなります」と言います。

領海問題

= 加藤英夫、1997年6月21日 =

これから書くことは、本来であれば、ロイ・ウォルトンの'インフルエンシャルペアーズ'解説の備考に書くような内容であるかもしれませんが、しかしながら、書くことが長くなりますし、重要な改良案であると思いましたので、私の改案として別に書くことにいたしました。

ファルブズの原案を読んで、面白いとは思いますが、このままなら絶対にやらないと思う部分がありました。それは最初にデッキを相手に渡して、左右交互にディーラーさせることです。そんなことはやらせる必要がないのです。

それは準備段階でやっておけばよいのです。すなわち、ファルブズが説明しているようにセットした一方のデッキを、左右にディーラーして分け、2つのポケットをそのまま重ねます。ただし、上半分のボトムカードをキーカードとして記憶しておきます。

そのようにしておくことにはいくつもの利点があります。最初の部分をつぎのように演じることができます。

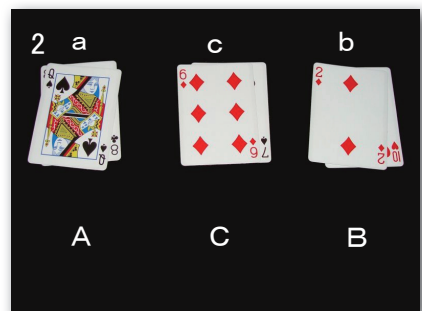
一方のデッキをオーバーハンドシャフルの体勢に持ち、中央より数枚下で分け、右手で分けたカードをシャフルしますが、1枚目をジョグします。1回目のシャフルのあと、ジョグをブレイクに変え、ブレイクまでシャフルしたら、残りをまとめて落とします。これで上半分は最初の状態に保たれます。

デッキを表向きにリボンスプレッドして、「よく混ざっています」と言います。ファルブズのセットの状態ではリボンスプレッドして見せられません、このやり方ならよく混ざっていることをはっきりと見せられます。

広げたときにキーカードを見つけ、そこにブレイクを作りながらスプレッドを閉じて、デッキを裏向きにしてブレイクから分け、セットがくずれた方の半分を相手に渡します。ここから先は原案のように進めます。

もうひとつ、原案通りにやりたくないことがあります。それはカードを置く位置のことです。

私は図2のように置きます。相手に(a)に黒のペア、(b)に赤のペア、(c)に赤と黒のペアを置かせ、それらに対してもマジシャンは(A)、(B)、(C)きます。このように置いた方が、赤と黒に分かれて、中間は混ざっているという状態をクリアに表現できると思います。



そのような置き方をすることによって、ひとつの演出を思いつきました。赤のペアは中国の領海、黒のペアは日本の領海、そして赤黒が混ざっているのは公海もしくは接続水域というようなことを言って、領海問題の話をするのです。

「中間は2つの国間の公海や接続水域ですから、赤と黒が混ざっています」と言って、先に中央のポケットを見せます。それから「こちらは日本の海ですから、黒いカードばかりです」と言って、黒いポケットを見せます。「そしてこちらは中国の海ですから、赤いカードばかりです」と言って、赤いポケットを見せます。

ただし、この演出は中国人がいる場では使わないでください。反日デモを誘発しかねませんから。

Part 3 ロイヤルマリッジ

4枚のQと4枚のKが何らかのプロセスのあとに、同じマークのQとKのペアになるという現象は、'ロイヤルマリッジ'として大別できますが、厳密にはペアになるプロセスによっていくつかのタイプに細分されます。

今日、一般的に'ロイヤルマリッジ'と呼ばれるマジックは、マジシャンが先に置いた裏向きの1枚のKの上に、相手に任意のQを裏向きにのせさせ、そのようにして作られた4組のペアを表向きにすると、すべて同じマークのペアになっているという現象です。

私の知っているかぎりでは、'ロイヤルマリッジ'という名称のマジックがもっとも古く見られるのは、エドウィン・ザクスの"スライトオブハンズ"(1877年)に解説されているものですが、つぎのような現象です。

4枚のKをデッキの中に入れてシャフルしたのち、1枚のQをボトムに置くと、トップからそれと同じマークのKが出現します。それを他のマークのQでも行います。

4枚のQの上に4枚のKをのせ、魔法をかけてから、上から2枚ずつ表向きにしていくと、同じマークのQとKのペアになるという、いわば'オイル&ウォーター'的なプロセスでQとKがペアになるという現象は、ニック・トロストの'コートシップ'に原型を見ることができます。

このマジックでは、ビドルムーブでQとKが混ぜられますが、いちどのカウントでペアにすることができないために、トロストは8枚をカウントしたのち、カードを4枚ずつに分けた状態で、さらに位置の調整を行っています。

ちなみに、エルマー・ビドルも、雑誌"ヒューガードマジックマンズリー"、1962年2月号に、表向きと裏向きで続けて2回ビドルカウントする方法を書いています。

1回のビドルムーブで4枚のQと4枚のKを交互にする方法を採用したのは、私の知るかぎり、ウィリアム・ミーゼルの'ラヴィングカップル'("クリエイティヴマジックオブウィリアム・ミーゼル"(1980年)が最初です。

QとKが違うマークでペアになっていて、それらが同じマークのペアに変化するという現象は、ニック・トロストの'コートカードコンレイヴ'("スリーペットシークレッツ",1960年ごろ発行?)に原点があると思われます。

当書には、マリッジ(結婚)というテーマには当てはまりませんが、J、Q、Kがそろうというタイプのものも収録いたしました。

ロイヤルマリッジ

= エドウィン・ザクス解説、“スライトオブハンズ”、1877年 =

* 方法 *

デッキの中から4枚のQを抜き出してテーブルに置きながら、4枚のKをトップに集め、そのあと4枚のKをパームしてスチールします。デッキを相手によくシャフルさせます。

デッキを受け取り、4枚のKをトップに戻します。そしてデッキのフェース側を観客に向けて持ち、Qの中から現在のデッキのトップにあるKのマークと同じマークのQを取り、デッキのフェースにのせます。

そして原文では、“ここで1枚のKをトップからフェースにパスします”と書かれていますが、パスのやり方の具体的な説明はされていません。フェースカードをなげるときにバックのKをスチールして、それをフェースに置いてカラーチェンジするやり方がよいと思います。

そしてフェースの2枚を見せ、同じマークのQとKがそろったのを示します。つぎのQをその上へのせ、同じ方法で同じマークのKを出現させます。あと2枚のKでも同じことを行います。

フルズメイト

= アレックス・エルムズレイ、雑誌“ジニー”、1973年2月 =

相手に4枚のKと4枚のQを自由にペアにさせると、マークがマッチしてしまうというロイヤルマリッジにおいて問題になるのは、相手がマークを本当にマッチさせてペアにしてしまうことがあることと、それが起こることが不確定であることです。むしろ、すべてのペアがマッチしない方が、ワンアヘッドの原理で処理しやすいものです。エルムズレイは、わざとひとつのペアもマッチさせないという巧妙な方法を考えつきました。

* 方法 *

始めるまえに、トップに4枚のKを記憶できる順で置き、その下に4枚のQを置きます。Qの順は関係ありません。Qの下に2枚の同じデザインのジョーカーを置いておきます。

4枚のKをテーブルに並べます。Kだということは告げずに、たんに「この4枚のカードを使います」とだけ言います。このあと、デッキをまん中へんから分けて、オーバーハンドシャフルを行います。するとQとジョーカーは、デッキの中央あたりにきます。1人目に向かって「あなたにあったカードを使うことにしましょう」と言って、表を自分に向けてカードを広げ、一方のジョーカーを抜き出します。その表を見せずに彼に渡し、「表を見てはいけません。テーブル上の好きなカードの前に置いてください」と言います。

彼が1枚のKの前にジョーカーを置いたら、そのKをジョーカーの上へのせ、そのペアをその人の前に置きます。あなたはKの順を知っているのですから、その第1のKが何のKであるか分っています。

まだ広げているカードの中から、第1のKとマッチするQを抜き出して2人目に渡し、「このカードがあなたにあっていでしょう。これを好きなカードの前に置いてください」と言います。

選ばれたKを2人目が置いたQの上へのせ、そのペアをその人の前に置きます。いま選ばれたKにマッチするQを抜き出して、3人目に渡して同じことをさせ、同じようにペアにしてその人の前に置きます。

デッキには2枚のQが残っていますが、残っているKと同じマークのQを抜き出して4人目に渡し、「あなたには選択の余地はありませんが、とにかく最後のカードの前に置いてください」と言って置かせ、その上にKをのせてペアにし、その人の前に置きます。

ここでデッキを残ったQがトップにくるようにカットします。ジョーカーはトップから2枚目にきます。ダブルリフトでジョーカーを見せ、「ジョーカーはじつはキューピッドだといわれていますが、それを証明してみせましょう」と言います。

2枚を裏向に戻し、トップカードのみを取って、デッキはわきに置きます。左手で4人目のペアを取り上げて（このペアはすでにマッチしている）、ジョーカーであると思われる第4のQを、2枚の間にさし込み、図1、まん中へんまで押し込んでアウトジョグ状態とします。



「ジョーカーがうまく2人を結びつけたか見てみましょう」と言って、左親指でカードを少し広げ、アウトジョグされているカードが本当に中央にあることを見せます。カードをそろえ、アウトジョグされているカードを完全に押し込みます。ふたたびカードを広げ、中央のカードの下端を右手でつかんで下へ引き抜きます。図2。



「あなたは選択の余地がありませんでした」と言い、左手の中で2枚をひっくり返してマッチしていることを見せ、4人目の前に置きます。

3人目のペアを取り上げ「あなたは2枚のうち1枚の選択の余地がありました」と言って、ジョーカーと思われるカードをその2枚の間にさし込むと見せかけて、2枚の下に入れて押し込んで

そろえてしまいます。そして3枚を広げ、中央のカードを下へ抜き出します。以上は本当に間を通した前回と同じように見えるようにやります。左手に残っている2枚を表向きにひっくり返し、マッチしていることを見せ、3人目の前に置きます。

2人目の方を向き、「あなたは3枚のうちの1枚を選びました」と言って、左手でペアを取り上げ、まえとまったく同様に行って、ペアがマッチしているように見せ、2人目の前に置きます。

1人目でもまったく同じことを行い、マッチしたペアを置いたのち、残っているジョーカーの表を見せて、「たしかにジョーカーはキューピッドなんですね」と言って終わります。

トウギャザーアットラスト

=リチャード・ヴォルマー、“ベストオブフレンズ 第2巻”、1985年=

これは‘ロイヤルマリッジ’の中で、他に例を見ない原理を使っています。すなわち、初めから同じKとQがマッチしているのに、マッチしていないように見せることによって、マッチング現象を実現しているのです。

一読するとあまりにも当たり前の原理なので、面白いマジックには思えないかもしれません。しかしながら実際にカードで操作してみると、カードが完全にミックスされたように見えるので、マッチした不思議さが十分に表現できることがわかるはずです。

* 方 法 *

4枚のKと4枚のQを抜き出して、表向きにテーブルに置きますが、上から4枚が異なるマークで、その下の4枚が上の4枚と同じマークの順になるようにします。KとQを上と下に分けてはいけません。なるべくよく混ざっているように見えた方がよいのです。残りのカードは使いません。

8枚を裏向きに持ち、ここでモンジュシャフルもしくはチャーリエシャフルを行います。‘もしくは’というのは、ローレインがどちらが正しい名称であるかわからないと述べていて、私もわからないからです。トップから1,2枚を取り、その上にボトムから1,2枚を取って、先に取ったカードの上へのせます。つぎにトップから取って下に入れ、つぎにボトムから取って上へのせ、ということをカードがなくなるまで続けます。いかにもカードがよく混ぜられたように見えますが、たんにカードをカットしたのと同等の結果になります。

カードをテーブルに置き、相手に1回カットさせます。それから上の4枚を取り、テーブルの右、残りの4枚を左に置きます。KとQがよく混ざっていて、2枚ずつ組み合わせると、どのような組合せになるか決まっていないことを説明します。

右の4枚を取り、ボトムカードをバックルして、上の3枚をトリプルターンオーバーして表を見せ、その

カードの名前を言います。裏向きにして上の 1 枚をテーブルの中央に置きます。左パケットのトップカードを表向きにして、そのカードの名前を言い、裏向きにして中央に置いた 1 枚の上に表向きに置きます。残りの 3 枚を右に置きます。

中央に置いた 2 枚を取り上げ、それら 2 枚が同じマークの K と Q ではないことを復唱したあと、カードをこすり合わせたり、手の中を通して魔法をかけてから、裏向きのカードを表向きにして、2 枚がマッチする K と Q であることを見せます。この 2 枚をわきに置きます。

左の 3 枚を取り、ダブルターンオーバーを行い、そのカードの名前を言います。裏向きにして、上の 1 枚を中央に置き、右の 3 枚のトップカードを表向きにして、そのカードの名前を言い、裏向きにして中央の裏向きの 1 枚の上に表向きに置きます。残りの 2 枚を左に置き、中央の 2 枚を取り上げ、先ほどと同じような魔法をかけ、2 枚がマッチしたことを見せます。

右と左の残りの 2 枚同士を重ね、適当にカットします。トップカードを表向きにして見せてから、裏向きにテーブルの中央に置きます。残りの 3 枚のうち、上の 1 枚をずらして、ボトムの 2 枚をダブルで引き出して表向きにして見せ、裏向きに戻し、上の 1 枚をテーブルの 1 枚の上ののせます。

手に残っている 2 枚に魔法をかけ、マッチしたことを見せ、それからテーブルの 2 枚がマッチしているのを見せます。

*** 備 考 ***

編集時点で調べたところ、上記で使われているシャフルはチャーリエシャフルであり、モンジュシャフルは似てはいますが、リバースファローシャフルに似た機能を持ったものであることがわかりました。左手に持ったパケットのトップカードを右手に取ります。つぎのトップカードを右手のカードの上に取ります。つぎのトップカードを右手のカードの下に取ります。つぎは上に取り、ということを最後まで続けます。結果として、奇数枚目が下半分に集まり、偶数枚目が上半分に集まることとなります。

最後に結ばれる

= 変案 : 加藤英夫、1999 年 3 月 16 日 =

前述のマジックは、ハンドリングがすっきりしない部分がありますので、つぎのようなバリエーションを考えました。

*** 方 法 ***

カードを 4 枚ずつに分けるところまで、原案と同様に進めます。上の 4 枚をテーブルに置き、残りの 4 枚はテーブルに置かずに、左手に持ち続けますが、上から 2 枚目の下にブレークを作ります。

左手のトップの2枚をダブルターンオーバーし、右手でテーブルのトップカードを表向きにします。2枚の表が同時に見える状態で、違うマークであると述べた方が、観客に負担を与えません。

左の2枚を裏向きにして、上の1枚をテーブルに置き、テーブルのポケットの上の表向きのカードを裏向きにして、先に置いた1枚の上ののせます。これから4つのペアを分散させて置いていくので、それら2枚を適当な位置に置いてください。なお、テーブルのポケットから取って置くカードを、表向きにして置いてかまいません。

左手のトップの2枚をダブルターンオーバーし、テーブルのトップカードを表向きにします。まえと同様に行って、2枚のペアをテーブルのどこかに置きます。

残りのカードを混ぜると言って、4枚を重ねて何回かカットしますが、結果的にもとの状態に戻るようなやり方をします。トップの1枚を右手に取り、つぎをダブルプッシュして1枚目の下に広げて取り、右手を返して表を見せ、「この2枚も違うマークです」と言います。裏向きに戻して左手の1枚の上ののせ、上の2枚をテーブルのどこかに置きます。

「これもこれも違うマークでしたから、当然残りの2枚も違うマークです」とそれぞれのペアを指さしながら言って、そして手元の2枚を表向きにします。同じマークなので驚く演技をして、「魔法でペアがそろいました」と言って、他の3組を表向きにします。

マイフェアレディーズ

= 加藤英夫、1998年1月22日 =

* 現象 *

表向きの4枚のKをバラバラにデッキの中に入れます。デッキを広げてKの隣りのカードを見せませんが、どのKに対してもランダムなカードがあります。魔法をかけてからそれぞれのKと隣りのカードを抜き出すと、それらのペアはすべて同じマークのKとQのペアに変化しています。

* 方法 *

「4枚のKを使います」と言って、表を上に向けて広げていき、4枚のKをアップジョグしながら4枚のQをスプレッドの下に密かにカルして、カードを閉じるときに4枚のQをバック（トップ）にセットします。4枚のQのトップからの順を知っておく必要があります。

デッキを裏向きにします。4枚のKを抜いて表向きにしてトップに置き、Kのマークの順をQの順番の3枚目、4枚目、2枚目、1枚目の順に並べます。そして4枚のKをそろえるときに、下に2枚のQをアディクションします。そしていちばん下のQの上に右親指でブレイクを保持します。そしてデッキのトップに残っている2枚のQのうち、トップのQの下に左小指でブレイクを保持します。

これから行うことは、“Card Magic Library” 第7巻、41 ページに解説されている、'マリッジカウント'の変法です。表向きの4枚のKをカウントしながら、Kの間に3枚のQをはさむことです。こちらのやり方は、デッキの上で行うという違いがあります。

1枚目のKをデッキの上に引いて取ります。2枚目のKを取るとき、左小指のブレークの上の2枚を右手のカードの下にスチールします。そして2枚目のKの下に左小指でブレークを保持します。3枚目のKを取るとき、右親指のブレークの下に3枚を3枚目のKといっしょにデッキの上に置きます。そして右手に残っている2枚をいちばん上に置きます。いま、上から7枚目の下にブレークがあります。

ブレークより下の1枚を上カードに加えて、合計8枚のカードを右手で取ります。相手に左手のカードを渡して、シャフルさせたのち、テーブルに置かせます。

「これから4人のKの花嫁を見つけます。まん中へんから持ち上げてください」と指示しますが、そのときあなたは上から2枚のカードをダブルリフトして取り、相手がカットしたら、下半分の上に2枚をのせます。いったん相手が持ち上げたカードをその上にのせさせます。

「つぎはまん中より少し下で分けてください」と指示し、あなたはダブルリフトして2枚を相手がカットした下のポケットの上に2枚を置き、相手が持ち上げたカードをその上に置かせます。「つぎはまん中より少し上で持ち上げてください」といって、同様に2枚のカードを間にはさみます。最後は「最後は少しだけカードを持ち上げてください」と指示し、同様に2枚のカードをはさみます。

現在の状態は、表向きのKがデッキの中に分散していて、それぞれのKの下にマッチするマークのQがあります。

「どんなカードがKの相手に選ばれたか見てみましょう」と言って、カードをスプレッドしていき、表向きのKが出てきたらKとその上の裏向きの1枚をアウトジョグし、図1のように両手を上げてカードのフェースを相手に見せ、「このKの相手は何のカードですか」とたずねます。そのとき図のように左手のトップカードを少し左上にずらします。



そして右手のカードを左手のカードの上ののせるとき、ずらしたカードの下にKをさし込み、図2、スプレッドを続けます。2枚はアウトジョグしたままです。



あと3枚のKとその上のカードでも同じことを行います。結果的に8枚のカードがアウトジョグされた状態になります。8枚のカードを図3のように広げて、反対側を見せます。「このように4つの王家に様々な血が混ざることになりました」と言って、突き出ている8枚を押し込みます。



「しかし、王家にはそれぞれ家風とかしきたりがあります。4人の花嫁は時がたつにつれて、それぞれの王家に溶け込んでいきます」と言って、デッキをリボンスプレッドします。そしてKとそれに向かい合っているカードを2枚のペアで4組抜き出します。「そして4人はりっぱな王妃になりました」と言って、裏向きのカードを表向きにします。

ロイヤルファミリーズ

=ピーター・ケーン、“ファーザーセッションウィズピーター・ケーン”、1975年=

‘ロイヤルマリッジ’とは言えないかもしれませんが、J、Q、Kがそろってしまうという現象です。

* 準備 *

絵札12枚を抜き出し、トップからJD、JC、JH、JS、QD、QC、QS、QH、KD、KC、KH、KSの順にセットします。ピーター・ケーンはパケットトリックとして用意していたそうです。

* 方法 *

表向きに12枚を広げ、「絵札は、各マークのJ、Q、Kで、合計12枚あります」と言って、カードを閉じて右手のビドルポジションに持ちます。「Kが1枚」と言って、左手にいちばん上のKを引いて取り、「2枚」といってつぎのKを取り、「3枚、4枚」と取りますが、3枚目のKの下にブレークを作ります。

「Qが1枚」と言って、1枚目のQを引いて取るとき、ブレークの上の2枚のKを右手のカードの下にスチールします。ブレークを作る必要はありません。「2枚、3枚、4枚」といって、4枚目までのQを引いて取りますが、3枚目のQの下にブレークを作ります。

「Jが1枚」と言って、1枚目のJを引いて取るとき、ブレークの上の2枚のQを右手のカードの下にスチールします。ブレークは作りません。「2枚、3枚、4枚」と言って取りますが、最後は重なったカードをすべて置きます。

カードを裏向きにディーリングポジションに持ちます。「ダイヤとかハートというマークは、じつはい

ギリスの4つの王家を表しています。Kが王様で、Qが王妃、そしてJが兵士です。このように魔法をかけると、それぞれのマークごとに、3枚が集まります」と言いながら、このセリフの間にトップから3枚目の下にブレイクを作ります。

カードに魔法をかけ、トップカードを表向きにしてトップにのせ、すぐにブレイクの上の3枚をそろえて右手に取り、つぎのカードをプッシュして右手のカードで表向きに返します。それを右手のカードの上ののせ、それらでつぎのカードをひっくり返し、右手のカードの上ののせます。スペードのK、Q、Jが現れました。右手のカードをいったん左手のカードの上ののせ、広げてスペードの3枚をテーブルに置きます。

つぎはハートのK、Q、Jをまえと同じようなやり方で表向きにして、テーブルに置きます。今回はフォールスムーブは行いません。

「あとはダイヤとクラブです」と言いながら、6枚を裏向きに広げ、左親指を上から3枚目の裏面に当てて、右中指の先を上から4枚目の表面に当てて、両手を左右に引いて、3枚目と4枚目をスイッチしながら3枚ずつに分けます。両手を返して両方のポケットの表を見せ、それらをテーブルに置きます。

*** 備 考 ***

カードの裏面の模様を、各王家の紋章にすると、アセンブリーの現象がより明確になります。クラブのKの裏面はダイヤ王家の紋章、ダイヤのQの裏面はクラブ王家の紋章とします。他のカードの裏面は、それぞれの王家の紋章とします。スペードのKを表向きに返すときだけ、手元のカードをビベルする必要があります。

ロイヤルハワイアンファミリーズ

= 加藤英夫、2011年2月2日 =

これも'ロイヤルマリッジ'とは言えませんが、やはりJとQとKをそろえるという現象ですので、関連作品として収録いたしました。ハワイ滞在中に考案したので、上記のような題名といたしました。

*** 準 備 ***

4枚のKの裏面左上と右下に、Kだとわかるマークをつけておきます。そして4枚のKをデッキの中に分散させておきます。

4枚のQと4枚のJをトップにセットしておきますが、マークについては、QもJもKのトップからの順と同じにしておきます。

* 方 法 *

デッキを両手の間に表を自分に向けて広げ、「4枚のKを使います」と言って、出てきたKを抜いて表向きにテーブルに重ねていきます。4枚抜き出したら、4枚のKを裏返します。

デッキを裏向きにリボンスプレッドします。「最初は記憶術です。4枚のKをあなたに分散して入れてもらい、Kの位置を記憶します」と言って、いちばん上のKを相手に渡し、スプレッドのトップ近くに裏向きで入れさせますが、トップから8枚目までに入れさせてはいけません。それより下の部分を指さして、「このあたりに入れてください」と言います。10枚目ぐらいが適切です。

つぎのKを渡し、「つぎはこのあたりに入れてください」と言って、20枚目あたりに入れさせます。同様に3枚目のKを30枚目、4枚目のKを40枚目あたりに入れさせます。それからカードをそろえて取り上げます。

「記憶を頼りにKを見つけます」と言って、表を相手に向けてデッキを広げ、マークによってKを見つけ、そのKをアップジョグして、アップジョグカードの左でカードを分けるとき、トップにあるQを左親指で左にすべらせて、図1、



図2のようにアップジョグしたKを示します。



さらにカードを広げてあと3枚のKでも同じことを行って、4枚のKをアップジョグしていきます。そのつどQがKの左にセットされます。4枚のKを押し込んでそろえます。

「いまは記憶術でしたが、つぎのはマジックです」と言って、同じように広げていき、KとQをアップジョグするとき、JをQとKの左に密かにロードします。KとQのペアを4組アップジョグしました。それらを押し込んでそろえます。

「最後は魔法です」と言って、デッキを表向きにして魔法をかけます。そして表向きに広げていき、出てくるJ、Q、Kを抜き出してテーブルに置いていきます。

加藤英夫のホームページ

<http://www.magicplaza.gn.to/>

Card Magic Magazine 第 10 号

発 行 2013 年 2 月 3 日

著 者 加藤英夫

発行者 加藤英夫

hae16220@ams.odn.ne.jp

